

デルモベートスカルプローション0.05%

Dermovate Scalp Lotion 0.05%



規制区分：
劇薬

承認番号 21900AMX00016
販売開始 1979年4月

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

- 2.1 細菌・真菌・スピロヘータ・ウイルス皮膚感染症及び動物性皮膚疾患（疥癬・けじらみ等）[感染を悪化させるおそれがある。]
- 2.2 本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者
- 2.3 鼓膜に穿孔のある湿疹性外耳道炎 [穿孔部位の治療が遅れるおそれがある。また、感染のおそれがある。]
- 2.4 潰瘍（バーチェット病は除く）、第2度深在性以上の熱傷・凍傷 [皮膚の再生が抑制され、治療が著しく遅れるおそれがある。]

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	デルモベートスカルプローション0.05%
有効成分	lg中 日局クロベタゾールプロピオン酸エステル0.5mg
添加剤	カルボキシビニルポリマー、イソプロパノール、水酸化ナトリウム

3.2 製剤の性状

販売名	デルモベートスカルプローション0.05%
剤形・性状	無色澄明の粘稠なローション剤で、イソプロパノール臭がある。

4. 効能又は効果

主として頭部の皮膚疾患

- 湿疹・皮膚炎群
- 乾癬

5. 効能又は効果に関連する注意

皮膚感染を伴う湿疹・皮膚炎には使用しないことを原則とするが、やむを得ず使用する必要がある場合には、あらかじめ適切な抗菌剤（全身適用）、抗真菌剤による治療を行うか、又はこれらとの併用を考慮すること。

6. 用法及び用量

通常1日1～数回適量を塗布する。なお、症状により適宜増減する。

8. 重要な基本的注意

- 8.1 皮膚萎縮、ステロイド潮紅などの局所的副作用が発現しやすいので、特に顔面、頸、陰部、間擦部位の皮疹への使用には、適応症、症状の程度を十分考慮すること。
- 8.2 大量又は長期にわたる広範囲の使用（特に密封法（ODT））により、副腎皮質ステロイド剤を全身投与した場合と同様な症状があらわれることがあるので、特別な場合を除き長期大量使用や密封法（ODT）を極力避けること。[9.5、9.7、9.8、11.1参照]
- 8.3 本剤の使用により症状の改善がみられない場合又は症状の悪化をみる場合は使用を中止すること。
- 8.4 症状改善後は、速やかに他のより緩和な局所療法に転換すること。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ使用すること。使用する必要がある場合には、大量又は長期にわたる広範囲の使用を避けること。動物実験（ラット）で催奇形作用が報告されている¹⁾。[8.2参照]

9.7 小児等

長期使用又は密封法（ODT）は避けること。発育障害を来すおそれがある。また、おむつは密封法（ODT）と同様の作用があるので注意すること。[8.2参照]

9.8 高齢者

大量又は長期にわたる広範囲の密封法（ODT）等の使用に際しては特に注意すること。一般に、副作用があらわれやすい。[8.2参照]

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には使用を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

眼圧亢進、緑内障、白内障（いずれも頻度不明）

眼瞼皮膚への使用に際し、あらわれることがある。大量又は長期にわたる広範囲の使用、密封法（ODT）により緑内障、白内障等の症状があらわれることがある。[8.2参照]

11.2 その他の副作用

	頻度不明
皮膚の感染症 ^{注1)}	真菌症（カンジダ症、白癬等）、細菌感染症（伝染性膿痂疹、毛のう炎等）、ウイルス感染症
過敏症 ^{注2)}	紅斑、発疹、蕁麻疹、そう痒、皮膚灼熱感、接触性皮膚炎
その他の皮膚症状	ステロイド皮膚 ^{注3)} （皮膚萎縮、毛細血管拡張、紫斑）、色素脱失 ^{注3)} 、酒さ様皮膚炎・口囲皮膚炎 ^{注3)} （ほほ、口囲等に潮紅、丘疹、膿疱、毛細血管拡張）、多毛 ^{注3)} 、ステロイドざ瘡、魚鱗癬様皮膚変化、一過性の刺激感、乾燥
その他	下垂体・副腎皮質系機能抑制 ^{注4)} 、中心性漿液性網脈絡膜症

注1) 密封法（ODT）の場合に起こりやすい。このような症状があらわれた場合には、適切な抗真菌剤、抗菌剤等を併用し、症状が速やかに改善しない場合には、使用を中止すること。

注2) これらの症状は原疾患の症状に類似している場合がある。

注3) 長期連用によりあらわれることがある。このような症状があらわれた場合には徐々にその使用を差し控え、副腎皮質ステロイドを含有しない薬剤に切り替えること。

注4) 大量又は長期にわたる広範囲の使用、密封法（ODT）によりあらわれることがある。また、このような場合において、使用中止により急性副腎皮質機能不全に陥る危険性があるため、使用を中止する際は患者の状態を観察しながら徐々に減量すること。

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

14.1.1 治療以外の目的（化粧下、ひげそり後など）には使用しないこと。

14.1.2 火気の近くでは使用しないこと。

14.2 薬剤投与時の注意

眼科用として使用しないこと。

15. その他の注意

15.1 臨床使用に基づく情報

乾癬患者に長期大量使用した場合、治療中あるいは治療中止後、乾癬性紅皮症、膿疱性乾癬等がみられたとの報告がある²⁾。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

ラットに³H-クロベタゾールプロピオン酸エステル0.15%含有軟膏、クリーム及び0.05%外用液を経皮投与した結果、いずれも血中濃度は投与後8時間まで上昇した後、その後96時間まではほぼ一定もしくは非常にゆるやかに減少した。

16.2 吸収

切除目的の腋臭症患者の腋窩皮膚に³H-クロベタゾールプロピオン酸エステル0.05%含有クリームを塗布（密封法（ODT））した後、オートラジオグラフィ法で表皮への取り込みを経時的に観察した結果、塗布後30分で既に表皮に取り込まれ、塗布後5時間で定常状態となり、この状態は塗布後24時間まで持続した。また外用剤除去24時間後も表皮内に貯留していた³。

16.3 分布

ラットに³H-クロベタゾールプロピオン酸エステル0.15%含有軟膏、クリーム及び0.05%外用液を経皮投与した結果、96時間後の体内残存量（塗布部を除く）はそれぞれ0.42%、0.96%及び2.85%であり、特定の組織への親和性は示さないものの脾臓中濃度において若干高い傾向が認められた。

16.5 排泄

ラットに³H-クロベタゾールプロピオン酸エステル0.15%含有軟膏、クリーム及び0.05%外用液を経皮投与した場合の主排泄経路は糞中排泄であり、投与後96時間までの糞中及び尿中排泄率の合計はそれぞれ1.22%、9.20%及び8.86%であった。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

17.1.1 国内第Ⅲ相試験

湿疹皮膚炎、脂漏性皮膚炎、尋常性乾癬などの皮膚疾患を頭部に有する成人及び小児患者184例を対象とした非盲検試験において、本剤を適量、1日2～3回患部に滴下した時の本剤の有効率は、下表のとおりであった。なお、症例の約85%が24日以内の使用であった^{4),5)}。

疾患名	有効率% (有効症例数/症例数)
頭部の湿疹・皮膚炎群	90.6 (125/138)
頭部の乾癬	89.1 (41/46)

副作用発現頻度は、15.2% (28/184例)であった。その内訳は、刺激感26例、癢疹様発疹1例及び痒疹1例であった。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

クロベタゾールプロピオン酸エステルは合成コルチコステロイドの一種であり、炎症性サイトカイン産生の抑制及びアラキドン酸代謝の阻害等のメカニズムを介して抗炎症作用を示すと考えられる。

18.2 血管収縮作用

クロベタゾールプロピオン酸エステルはMcKenzieらの方法による健康成人皮膚における血管収縮試験（皮膚蒼白度を指標）においてフルオシノロンアセトニドの約18.7倍、ベタメタゾン吉草酸エステルの約5.2倍の血管収縮作用を示した⁶⁾。

18.3 肉芽腫抑制作用

クロベタゾールプロピオン酸エステルは副腎摘出ラットにおける綿球肉芽腫抑制試験においてヒドロコルチゾンの112.5倍、ベタメタゾン吉草酸エステルの約2.4倍の肉芽腫抑制作用を示した⁷⁾。

18.4 浮腫抑制作用

クロベタゾールプロピオン酸エステルはラットにおけるホルマリン浮腫及びカラゲニン浮腫抑制試験においてヒドロコルチゾンの約36～161倍、ベタメタゾン吉草酸エステルの約2～4倍の浮腫抑制作用を示した⁷⁾。

18.5 皮膚局所への影響

クロベタゾールプロピオン酸エステル0.05%含有軟膏及びクリームのラットにおける塗布部位の皮膚萎縮に及ぼす影響は、0.025%フルオシノロンアセトニドより軽度であった⁸⁾。

18.6 全身への影響

クロベタゾールプロピオン酸エステル0.05%含有軟膏及びクリームを成長期のラットの背部皮膚に塗布した結果、胸腺萎縮作用及び体重増加抑制に及ぼす影響は0.025%フルオシノロンアセトニドより軽度であった⁸⁾。

19. 有効成分に関する理化学的知見

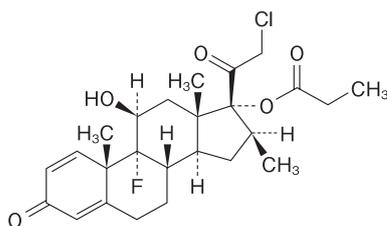
一般的名称：クロベタゾールプロピオン酸エステル (Clobetasol Propionate)

化学名：21-Chloro-9-fluoro-11 β ,17-dihydroxy-16 β -methylpregna-1,4-diene-3,20-dione 17-propanoate

分子式：C₂₅H₃₂ClFO₅

分子量：466.97

化学構造式：



性状：白色～微黄白色の結晶性の粉末である。メタノール又はエタノール（99.5）にやや溶けやすく、水にほとんど溶けない。

融点：約196℃（分解）

分配係数（logP）：3.8（pH7.1、1-オクタノール/水系）

22. 包装

10g [1ボトル] × 10

23. 主要文献

- 1) 倉本昌明ほか：基礎と臨床。1975；9：3259-3283
- 2) Tan RS-H：Proc R Soc Med. 1974；67：719-720
- 3) 竹田勇士ほか：西日本皮膚科。1975；37：796-801
- 4) 亀田 洋：基礎と臨床。1976；10：313-317
- 5) 末次敏之ほか：西日本皮膚科。1975；37：1016-1022
- 6) Munro DD, et al.：Br Med J. 1975；3：626-628
- 7) 中村悦郎ほか：共立薬科大学研究年報。1974；19：13-25
- 8) 武田克之ほか：西日本皮膚科。1977；39：775-784

24. 文献請求先及び問い合わせ先

グラクソ・スミスクライン株式会社

東京都港区赤坂1-8-1

メディカル・インフォメーション

TEL：0120-561-007（9：00～17：45/土日祝日及び当社休業日を除く）

<https://jp.gsk.com>

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

グラクソ・スミスクライン株式会社

東京都港区赤坂1-8-1